

〔書評〕

渡辺久義氏の

『イエイツ』について

松田誠思

……書いてある詩は楽譜と同じであつて、演奏者がいなければ、音楽にならない。私は私の全存在を使つてイエイツを演奏してみたいつもりである。イエイツは私という人間がいない限りついに本来の樂の音を發することは無いという意識にとりつかれて書いた。……私は私の体験としてのイエイツを提供するほかなかつた。このことと、イエイツを忠実に客観的に伝えるということとの間に、矛盾はないと思つている。（「序」―傍点引用者）

イエイツは一つの強い力をもつて渡辺氏の深部に働きかけ、これに感応した氏の精神に独自の批評的衝動を産み出した。すなわち詩にひそむ「磁力」にも似た

不可解な力の中に身をおきつつ、その力の源泉と性質を究めるといふ苦しい努力を強いた。そのために必要なイエイツ詩熟読と検証の作業は、ある樂曲が、演奏に先立つて譜面の解読による樂想の把握と再現のための技術的習練を要求するように、イエイツ詩を、少なくともその骨格を生きた形で呈示しようとする渡辺氏にとつても、基本的前提であつたらう。しかし、細部の吟味を経て、それぞれの部分が全体の中で占めるべき位置や比重を構造的に捉える作業は、氏におけるイエイツ体験の内実を明確化するに必須の手段ではあつても、当然のことながら体験自体にとつてかわることができず、それを生きた形で再現するには、おのずと別種の手続きなり表現上の工夫を要する。これを氏は音楽家における「演奏」行為になぞらえているのであつて、本書が書かれねばならなかつた深い理由がそこにあり、論述の形式と文体に独自の性格を与えていると看做してよい。

これを読者の側のこととして言い換えれば、イエイツ詩の骨格を呈示するために選ばれたいくつかの基本

的観念が、同時にイエイツに係わる渡辺氏の詩的体験の表象として、どのように定義され、あるいは再定義されているか、氏の「演奏」行為によってどのような意味の奥行きを開示しているかを、本書の論述と文体のうち之感得するのぞなければならぬだろう。

ところで、渡辺氏の中にこのような批評的衝動を引き起こし、「さまざまの相貌の奥にある一人のイエイツ」を求めようとさせた詩人の独自性とは何か。彼の人格の根本にあつて、個々の詩や劇作品に「磁力」にも似た不思議な力を与えているものは何か。それを一言で要約することはもちろんできないが、渡辺氏のイエイツ論がこれを基軸に展開している以上、おおよその見通しを立てておかねばならない。すなわち詩人の生涯と仕事を支えかつ方向づけた次のような信念と情熱が、まず問題になるだろう。

私が二十三か四の頃のある日、ちょうど半睡状態にあるときに文章が浮かんでくるように、私の意志とは無関係に、こういう文章が頭の中で出来上るよう

に思えた——「汝の考えをハンマーで打つて一丸とせよ。……そして何年間も私はその文章によって自分の仕事のすべてを吟味した。私には三つの関心事があつた——文学の形に対する興味、哲学の形に対する興味、ナショナルリテイ国民意識に対する信仰。これらはいずれも互いに関係がないように思えたが、しかし次第に、私の文学に対する愛と国民意識信仰が一つになつた。それから何年もの間私は、これら二つは私の哲学の形には関係がないが、ひたすら正直であるように、一つのもの^を他のものによつて強制しないようにしていればそれらは一つの興味になるだろう、と自分に言つてきかせていた。思うに今、その三つは一つになつた、あるいはその三つは一つの信念を表現する別々の方法なのである。（もし私が二十四才だつたら）」

「三つの関心事」それぞれの内容を立入つて論ずる必要はさしあたりない。青年イエイツに芽生えた信念とそれを生涯の指針として支え続けた情熱のありように注目すればよい。彼は、一箇の人間の生をその全体性において生きること、生きつつ認識しようとする道

を半ば無意識の要請として直覚し、これに忠実であるうとした。それは、自己の生の中に自我意識の及ばぬ何ものかの強い働きかけを感じ取り、これに従う意志的選択を行なったことを意味する。意識的自我に現われるいくつかの関心事が互いにどれほど無関係に見えるようとも、それが彼の人格全体に係わるものである限り、個の存在を超えた何物かと深く結びつく可能性を信じたということにはかならない。周知のとおり彼の言う「三つの関心事」とは、アングロ・アイリッシュである彼のアイルランドへの自己同定に係わる問題であり、また幼少の頃からなまなましく体験していた他界の感觸、あるいは死者の世界の手応えに基づくオカルト研究であるが、何よりも一箇の人間の全体像を表現しうる文学形式の摸索であった。「思うに今、その三つは一つになった、あるいはその三つは一つの信念を表現する別々の方法なのである」と言う時、その「一つの信念」とは、若い日に半ば無意識の直覚としてあった生の深い根柢、自己を超える何ものかに向かつて飛躍し合体しようとする意志を指すだろう。そのよう

な自己超脱の試みに対して、「三つの関心事」は形を異にするにせよ、等しく本質的な契機でありうることを、彼は半生にわたる経験を通じて確認したと言つてよい。言うまでもなく、彼は人生の謎が解けたと言つていのではない。若い頃とは別様に生き生きと感ぜられるようになったと言つていのである。無意識の声の語るところのものを、意識のレベルで性急に解釈したり歪めたりせず、不安定な自己に耐えること、安易な自己限定によつて生の全体性を損なわぬこと、つまりは生の奥にある謎に感応しつつ不断に自己の成熟を計る道を、彼は選んだ。

イエイツと彼の詩を評して、渡辺氏がしばしばその「正直」を言い「誠実」を強調するのは、このような心的態度の表われを指すもので、いわゆる生活倫理の徳目として流通している概念とは必ずしも重ならない。「たしかに正直ということはいエイツ詩全体の最大の属性に数えてもよいだろう。それが人をうつのはまずその正直さのゆえである。しかし正直だけで詩が書けるものではなく、それを称えてやりすごせるほど」彼

の詩は単純な構造を持つてはいない。それは、あるべき自己やありうる自己のみならず、自己の中にあるこれに対立するものを含めての自己吟味であり、存在の不安に耐え得ぬ者が陥る偽瞞と幻想を斥け、自他に對する誠実を貫こうとする意志の謂である。可能な限り広く深く自己を意識化し、矛盾と葛藤をしばしば含むその種々相に対応する声を与えること、すなわち自己劇化の手法によつて一箇の人格の独自性を全的に表現しようとするのが、彼の詩作の眼目である。渡辺氏はイエイツ詩の中心的な力の源泉と働き方を見つめ、これに従おうとする。先にふれたイエイツの「三つの関心事」が有機的に結びつく一つのもの（ユニテイ）であり、その統一体として彼の詩を読むという態度に徹している。これはイエイツ研究者のあいだでは常識に属することかもしれないが、実践はきわめてむずかしいのであつて、イエイツという「強力な磁場」への積極的関与を促す原体験とも言うべきものが、論者の中で生き生きと保持されていなければかなわぬことである。渡辺氏はこの課題に正面から取り組み、詩人の意

識のドラマと精神の運動に参入しようとした。それを促した第一の契機は、おそらく最晩年の劇作『煉獄』の謎めいた力であつたらうが、なぜこのような「反人間」の劇が書かれねばならなかつたのかという問いは、これに衝撃を受けた氏自身の心性への問いと重なり、容易な解決を許さなかつたし、多年の思索を要したにちがいない。青年期から氏が耽読したと思われるニーチェ、ドストエフスキー、キェルケゴールが、イエイツに劣らず本書における氏の問題意識と文体の中に生動しているのは、決して偶然ではない。そしてイエイツ熟読による詩人の生の追体験の過程は、同時に渡辺氏自身の成熟の度合いに依じて深化し、深化に裏付けられた自己批評の一形式へと発展した。「体験としてのイエイツを提供する」とは、論者の対象に対するこのような関係を指すだろう。

そのようにして渡辺氏は、さまざまの相貌を見せるイエイツの根源に、つねに変わらぬ駆動力の働きを見定め、その方向性と運動の現われを詩的構造の中に確認するに至つた。それは、おのれ一箇の自足を許さず

絶えず何かを求め不安な魂の動きであり、氏の言葉を借りれば、「人間を超えたある大きなものへの自己同化」に向かう衝動である。もちろん直面する事柄に即し時機に依じてそれはさまざまの形をとる——本質的に対立する詩と政治、その避けがたい対立を回避せずこれ乗り越えて民族の魂ナショナルリテイの深みに到達しようとする信念（「ひとは自分自身の心の豊かさから、たった一人で祖国に尽すことができる」）。また、歴史が孕む恐怖と苦悶は、結局この世界に内在する暴力としての現実に呻吟する個人の苦悩や悲惨と同質のものであり、これを同じレヴェルで「悲劇」と捉え（「われわれは人生を悲劇として理解したときに生き始める」）、その死と再生のパターンを内面化し逆説的に受け入れようとする意志。あるいは人間の喜びはもとよりあらゆる苦悩と悲惨の因をなす「偶然」チャンスにたじろがず（「予期されぬものでさえあれば、何でも起ることが最善のこと」）、これこそが目的も意味もない世界の実体であると観じ、それをおのれの自発的意志によって「選択」チョイスすることが、すなわち人知の及ばぬ宇宙の意志に合体する道だ

という「力のニヒリズム」。さらには、「肉をもつことが悪でありながら、肉を捨てることが解決にならぬという業苦」の認識に徹し、そのペッシミズムの極まるどころ、なおも「天」の救いを斥け地上の生を肯定する「苦悩への意志」——これらがその具体的現われであるが、底流にあるのはつねに氏の言う「自己超脱」を目指す情熱であり、あの「三つの関心事」を有機的に結びつける一つの信念なのである。渡辺氏自身もこのような情熱ないし信念を論述の基本とし、文体の駆動力としているところに本書の独自性がある。事実氏は、これに関連してイエイツの散文を随所に引いているが、精選されたいくつかのものは、あえて何度でも立ち返って思考の踏み台にする。（引用文の選択基準は明確で、他の作家、思想家からのものについてもそれは言える。）それは決して単なる繰り返しではなく、多面的な現われ方の根底にあつてイエイツの人格を支えるものの中に身をおき、詩人とともに意識のドラマを生き精神の運動を起すに必須の手続きなのである。本書を貫く重要なモチーフ（これには音楽的意味を含

めてもよい)、少なくともその一つと言えるものは、イエイツの次の文の中に最も強く感じられる。

(「アニメ・ホミニス」)

われわれは疑念を起こさせるものを考えから押し隠すことによつて、いつわりの信仰をつくり出してはならない。なぜなら信仰は人知の達成しえた最高のもの、人が神に贈ることのできる唯一の贈物であり、だから誠意をもつて捧げられねばならないからである。またわれわれは醜さを隠すことによつて、虚偽の美しさをこの世界への贈り物としてつくり出してはならない。考えうるあらゆる苦悶に耐えた者のみが、考えうる最大の美を創り出すことができるのである。なぜならわれわれはわれわれが怖れるものを見、また予見したときにのみ、あの目の眩む、予期されぬ、翼の足をした彷徨者に出会う報酬を得るのである。われわれは彼がある意味で自分の存在の一部でなかつたならば、彼を見出すことはないだろう。しかしそれは、火が水の、騒音が静寂の一部であるような仕方では、自分の一部ではないのである。彼は不可能ならざるあらゆるものうち、最も困難なものである。なぜなら、たやすく手に入らないものだけが、自分の存在の一部になりうるからである。

ここには、特にイエイツ後期の詩が向かう方向と、個の詩や劇作品の背後にあつてこれを生気づける要因が、殆どすべて言い尽くされている。渡辺氏が直接言及すると否とにかかわらず、氏が本書で重点的に論じたすべての作品は何らかの形でこれに関係している。イエイツの文を要約することはできないし、要約は彼の詩の生命に至る道ではない。むしろ、詩の言葉と構造の具体相から、詩人が自己に課した掟の深い意味と生の軌跡が開示されなければならない。そのようにして渡辺氏は、イエイツ詩の大きな特色と言える自己劇化の手法と反語構造に注目し、たとえば制度としての政治や宗教の中にひそむ偽りや醜さに対する激しい憎悪を感じとる。また政治的ナシヨナリズムを排して、「一人ひとりの人間の魂の深みに見出すべき民族的アイデンティティ」を希求し、「われわれの内部にあつてわれわれ一人ひとりを結ぶ大きな生命、共通の根のようなもの」を探求する彼の根本的衝動と、その屈折し

た現われを読みとる。このような文脈の中で「一九一六年復活祭」の占める位置と、イエイツの詩的飛躍が評価されるのである。イエイツは〈国家〉や〈大義〉を奉ずるナシヨナリストたちや、衆をたのむ集団的思考を否定してきた。「彼には誠実な集団思考というものが、どうしても理解できなかったのである。ところが、その連中が大挙して命を投げ出した。これは不誠実ではありえなかった。……自分自身の信念をも、犠牲者に対する誠実さも、ともに裏切ることができないという詩人の良心の苦悩と感情のこまやかさ」、彼の直面したこの大きなデレンマが、深いところで自己と自己を超えるものとに等しく働く生の秘密を鋭く浮かび上がらせた。それは歴史と人生の根底にある「残酷な無垢」の力とも言うべきものであろうが、人間の善悪正邪に係わらず、苦痛と死を強いると同時に再生の契機をも含む、根源的な暗い力であるにちがいない。歴史と人生を同じレベルで「悲劇」として捉えるイエイツの認識が、そこから生まれる。リフレインに形象化された革命家たちの死の意味について、渡辺氏は言う。

「犬死だったかも知れぬ彼らの死を救うのは、彼らの死を悲劇として理解したときであり、その悲劇は一人ひとりの心の中で起るものでなければならぬ。『一つの恐ろしい美が生まれた』のは詩人の内部での出来事であり、そのためにこそ普遍性を得るはずのもの」である。そして「人生、あるいは歴史を悲劇として理解すること、それは不可避の現実の暴力に打ち克つこととであり」、同系列の一連の詩、たとえば「再臨」「一九一九年」「レダと白鳥」「神の母」などを経て、「意志による歴史の恐怖の克服」を一貫して追究するイエイツが、最晩年「瑠璃」^{ラリス・ラシュリ}や「渦巻」^{ガイヤーヌ}において到達した境地を、氏は克明に追う。その論証は力強く説得力に豊む。「注——ただ、「一九一六年復活祭」に関して、イエイツが革命家たちの死を「悲劇」として理解した経緯につき、「この事件の起る前の革命家たちと彼自身の交わりを、『わが娘のための祈り』に言われているような『根源的無垢』‘radical innocence’の相において捉えた」としているのは、納得しにくい。「悲劇」が起る前の平和な（と見える）日常生活を、「無垢」

と「儀礼」の支配する場、イエイツのいわゆる「たぐまぬ喜劇」casual comedy」と解するのは自然だが、これをただちに「根源的無垢」と結びつけるのは無理ではなからうか。むしろ、日常生活の「喜劇」性を一挙に暴いた力、「残酷な無垢」murderous innocenceの方がここでは重視されるべきではないか。これは私一箇の疑問であつて、歴史と人生に対するイエイツの悲劇意識の深化をこの詩に見る渡辺氏の論旨が、説得的であることに変わりはない。」

イエイツは、人間がそれぞれの仕方で「真」に近づきうるのは危機を通じてであり、危機においてのみ成熟への端緒が開示されると信じていた。先に引いた「アニマ・ホミニス」の一節で、「火が水の、騒音が静寂の一部であるような仕方でしか、自分の一部でない」ものを求める困難な闘いは、どのような経過をたどり結局どのような境地に彼を導いたか。この問題を解くもう一つの道筋が渡辺氏によって示される。すなわち「悪魔と野獣」における生の至福は、嵐の合い間にふと訪れる風のように、日夜「憎悪」と「欲望」につき

動かされている者がふと恵まれる無償の賜物にすぎぬとして、斥けられる。「本当の勝利とは何か。それは煩惱の垢にまみれた生身のからだをひっさげて闘うことの中から掴み取る何物かなのだ。……闘いをやめて淨福の境地に安住する者に、なんで勝利がやって来るものか——」。イエイツは自己自身との闘いを選び取る。この闘いの持続は、彼の運命との対話を深め、彼の言う「不可能ならざるあらゆるものうち、最も困難なもの」を、そのときどきに垣間見させたはずだが、彼は決しておのれに満足を許そうとしない。というよりも、自分が無一物であること、自己の無知、無力をますます強く意識する方向へと進み入った。晩年のイエイツに特徴的なのは、一方に自己抹殺への強い衝動を持ちながら、同時に無一物の自己を根底から作り直そうとする「狂気」じみた情熱である。あくまでも超越的なものによる救いを斥け、「いつわりの信仰」ならぬ、何かによつて神に相對する、あるいはそういう姿勢を貫くこと自体を神への暗黙の捧げ物にしようとしているかに見える。このような実存の不安の中に踏み止まっ

て自己自身であろうとするところに、渡辺氏はイエイツの深い宗教性を見るのである。

イエイツの絶望や不安は何ものかに向かっている。それは救いではない。なぜなら救いはイエイツが自ら退けるものなのだから。救いが安堵や休息を意味するものである限り、たとえそれが宗教的に保証されたものであっても、イエイツはこれを拒否する。にもかかわらずイエイツにとって、不安や絶望そのものが目的なのではなくて、それを通じて何かを掴もうとしている。そのものとは何か。もしそれが宗教的なものであるとしたら、何かわからぬそのものを掴もうとする態度や姿勢自体が宗教ではないのか。こういうことは言えないか——宗教とは何かを手に入れてどこかへ行ってしまうことではなく、とどまっていたまま深まることであると。現実の認識を深めることが宗教ではないのか。あるいはこうも言えないか——宗教とは見出すことでなく不断に求めること、絶えず満たされようとして満たされぬ空虚をおのれの中にもつことであると。少なくともイエイツの場合、それが心の最も深みにおける働き方であった。

（「最終詩集」）

渡辺氏の言う通り、「天上を志向しながらも、なおかつ地上を志向する」のがイエイツ詩の源泉であり原動力であって、その露わな骨格と鋭い緊張感は、特に晩年の詩に著しい。引き裂かれた魂の苦悩の極まるころに、「運命愛」（ニーチエ）と呼ぶほかない意志的な大なる現実受容が達成され（「人と木霊」、「極道老人」など）、反転して生者と死者を縛りつける業苦の中から絶望の祈りがしぼり出される（『煉獄』）。外見上の現われ方の違いの底にあるイエイツの根本的態度は、「悟りを求める者が悟るまいとする意志」、あるいは「この世界そのものの苦悩、この世のすべての人間の苦悩を置き去りにして、おのれひとりがなんで救われることができようか、という強固な意志」にあるとし、またこれを渡辺氏は「能動的受苦」と定義する。——これらの引用文はおのずとニーチエの、あるいはキェルケゴールの風貌に重なる。だが渡辺氏は彼らを援用してイエイツの詩を解いたのではない。イエイツの詩的構造と言葉にうかがえる精神と経験の構造が、キリスト者であると否とを問わず、彼らのそれに照応するこ

「ユレスボンド」

とを発見したと言ったほうがよい。

私はまた本書の論考からごく自然に次のような言葉を思い出す。「人間の宿命として与えられている状態はただ一つ……人間の魂の雰囲気は天と地の合流の中にある。人間とはなんと不条理の子供であることか。

この世界は、罪深い想念に曇らされた天の精霊のための煉獄のようなものだ。青年ドストエフスキーが手紙の中で吐露したこの苦悶が、彼の生涯を貫く創造の原動力であり、死を前に『カラマーゾフの兄弟』に結実したことは、晩年のイエイツとの不思議な暗合を感じさせないか。両者の語ろうとした〈最後の言葉〉が同じだと言うのではない。むしろ相異のほうが目立つだろう。しかし天に救いを求めつつ、しかも地上的生の強い誘引に苦悩する魂の持主が、安易な解決や妥協を排して、自己の経験に忠実であることによつて自己を超える者への誠実を貫こうとするとき、否応なく刻む生の軌跡に類比を感じるのである。渡辺氏が両者の比較を行なっているのは、決して恣意的なことではない。イエイツ後期の詩を読む上で、最も示唆的な書物の一

つが『カラマーゾフ』であると私は考えているが、今はその詳細に立ち入る準備がない。ただ渡辺氏もこの小説に言及しているのであえて一言するなら、カラマーゾフ一族の旺盛な生命力と生活欲が、神と信仰の問題に逢着して示すさまざまな様態は、言ってみればドストエフスキーの魂が孕む諸傾向の自己劇化であり、それがキリスト教的なものとは非キリスト教的なものとの対立を多分に含む以上、そこにイエイツの詩に特徴的なパターンとの類比が現われるのはむしろ自然なことではなからうか。(イエイツの「極道老人」に父フォルの風貌を見る渡辺氏と異なり、私は四兄弟の長兄ドミートリーに類似の精神構造を感じるが、今はこの問題を措く)。両者の比較は、人間の個性が、それぞれの拠つて立つ風土的・文化的・歴史的基盤と条件の違いによつて強いられる特殊性、屈折やよじれと、それを超えて現われる普遍的な精神構造につき、興味深く実り多い思索の糧になるはずである。不遜のようであるが、それを私は渡辺氏に期待したい気がする。

渡辺氏は、学者であれその他何であれ、専門家的発

想や見地が、人間のおかれてゐる基本的条件を直視する眼を曇らせてはならぬという潔癖な倫理感の持主であり、本書はその力強い思索の結晶である。すぐれたイエイツ研究という限定など無用であろう。ここに一箇の生きた書物があると言えは足りる。

(一九八二・十一月)

(渡辺久義著『イエイツ』(あぼろん社、一九八二年六月)については、高松雄一(「日本イエイツ協会会報」第十三号)、工藤好美(「英語青年」一九八二年十二月号)両氏の書評がある。角度は異なるがそれぞれ本書の独自性を簡明的確に指摘して有益である。拙文は本書の強い感銘を自分一箇の心覚えに書き付けたものにすぎず、引用文の出所は煩雑なので表示を殆ど省いた。)